

『現代の国語』教科書所収の複数学習材を連携させた教育実践の試み

黒澤 佑司⁽¹⁾

An Attempt at Educational Practice that Links Multiple Learning Materials Included in the 『Modern Japanese』 Textbook

Yuji KUROSAWA

KEYWORDS : 国語教育・複数学習材の連携 (Japanese language education, coordination of multiple learning materials)

In a Japanese language class, we attempted to compose multiple learning contents and link them together to develop the class. I was able to gain further understanding of the importance of not only developing reading comprehension skills, but also of reexamining oneself and reconsidering and devising ways to interact with others.

はじめに

本校での低学年次国語授業⁽²⁾では、モデルコアカリキュラムを具現化するべく、その授業教材として高等学校の教科書を用いている。現に論者もこの教科書を用いながら昨年度(2022年度)を終え、現在は二年次に学年を持ち上がってきている。今年度の二年次でも例年にならない、高等学校で使用されている教科書『現代の国語』ならびに『言語文化』を用いた教育活動を展開することとした。授業形態やその他多くの差異はあるものの、高等学校での「共通必

履修科目」を二年にわたり取り扱っているということになるわけである。本校で採択している教科書は筑摩書房のものであり、採録されている多くの読みこたえのある文章を用い、時間的な制約と格闘しながらここまで授業を展開してきた。この「時間的な制約」については高等学校現場と共通する課題であろうとは思いますが、年次をまたぐかたちで同一教科書を扱うことができる点は大変恵まれていると言つことができるだろう。

このようななか、その授業実践の試みについては、同教科書を扱う高等学校現場へのなにかしらの提案をもたらしものとなるようにも意識をしながらの

(1) 総合工学科 (Dept. of General Engineering)

(2) 国立高専のすべての学生に到達させることを目標とする最低限の能力水準・修得内容である「コア」と、高専教育のより一層の高度化を図るための指針となる「モデル」とを提示したモデルコアカリキュラム (MCC) 内、国語については以下の目標が設定されている。

人間性の基盤となる言語的・文化的教養を身に付け、自ら進んで効果的かつ対話的なコミュニケーションを実践することで、多様な他者を深く理解し、変化する状況にも柔軟に対応する言語能力や専門分野に関わる日本語の運用能力の向上を目指す。

ものとしている。この具体として、本稿においては『現代の国語』の教科書に採録されている文章群をおとした教育実践の一端を提案することとした。この『現代の国語』を用いた教育実践について、高等学校現場への応用側面においてや、高等学校でのもうひとつの必修科目である『言語文化』についても大変重要な論点とはなるゆえ、別稿での論を今後構想しているものの、より汎用的要素のある『現代の国語』⑤の授業実践をまずはおめどおしいいただき、高専、ひいては高等学校の教育現場でのさらなる議論の活性化に期したいと思う次第である。

一 教育実践にあたるデザインコンセプト

ひとつの事象をうのみにさせてしまうような単眼的思考にとどまらせることなく、クリティカルな視点をも備えた学生を国語というコンテンツを用いて養成していくこと。そのために、複数の文章群を用い、いかに国語にまつわるコンピテンシーを育成していくことができるか。このことは、高専のみならず高等学校現場においても喫緊の課題であり、さまざまに授業実践例が提出され、それをもとに議論が深まりつつある。生徒の変容や成長の過程や結果をはかるための「評価」の具体も含め、今後よりよい授業デザインが提案されていくこととなるであろうが、論者もそこに一石を投じながら学生たちと向き合っていく所存である。

さて、これまでの、そしてこれからの授業をデザインしていくにあたり、な

⑤ 多くの高等学校において、一年次の一週あたりの時間数として『現代の国語』は二時間、「言語文化」も二時間、計「国語」関連の授業で四時間、という設定になっている。そのうち二年次以降理系に進んだ生徒は、文学関連の学習については限定的な扱いにとどまることが指摘されている。すなわち、二年次以降は「論理国語」を第一の選択科目とし、そこに他の選択科目（文学国語」「国語表現」「古典探究」）を組み合わせて履修させるカリキュラムが多く、管見にはよるが「文学国語」については取り扱わない（他教科科目との関係上取り扱うことができない）という状況のようである。この現状をふまえ、たとえば東京書籍版『精選論理国語』には、その副読本として『学習課題ノート 小説三選』という書籍を追加で購入できるようになっており、そのなかには「山月記」「こころ」「檸檬」の本文テキストと演習問題が収録されている。文学テキストに触れる機会をなんとか担保しようとする（見方によっては苦肉の）試みのひとつであろう。文学関連コンテンツに触れる機会が極めて少なくなるなか、「言語文化」教科書や別コンテンツを用いた教育実践については別稿で論じることとするが、本稿では、「論理国語」に接続させる観点が多いこの「現代の国語」を用いた教育実践の具体を提案することとした。

⑥ 古田尚行「国語の授業」とは何か」（紅野謙介編『どうする？ どうなる？ これからの「国語」教育』幻戯書房 二〇一九年八月一〇日）

かでも論者が授業実践において大切にしているコンセプトを明確に論じた二つの論考を、自戒を込めて紹介したい。ややもすれば、教授型授業を展開するのみであった過去の授業スタイルについて猛省をうながすものでもあり、今後の授業展開における指針とすべき、示唆に富む内容が論じられているものである。

……「国語の授業」とは、他者の発する言葉の裏側にある欲望や権力性を批評し、自分もまた他者へ言葉を発する時には、欲望や権力性に極力自覚的であり続けようとするこゝへの教育、といえる。すなわち、他者に簡単に所有されず、他者を安易に所有せず、ともに言葉のやりとりを通じてよりよい社会を模索して作り上げていく力を育成する場である。そして、そこに必要なのは、他者の存在であり、他者を認識させていく仕掛けであり、環境である。自分と他者それぞれが前提としているもの、「自分たち」が前提としているもの、それらを可視化していき、批評していく場としての授業である。⑥

究極的には分かりあうことができない他者としてある人と人との教室において、物語や小説を媒介として、単に自分の視点で読んだり、主人公の視点のみで読んだりして終わるのではなく、登場人物や語り手の「視点」を意識しながら、相互に読みを交流し、互いに互いの理解を深めていくよ

うな仕掛けができればと、いつも考えています。⑤

後者の論考は、学習材を「物語や小説」と指定してはいるものの、ジャンルを問わず文章読解を進めるにあたっての視座として有意である。すなわち、文章における「視点」の意識のもと、教室にどう学習者同士の読みの「交流」や「理解」をうながすための「仕掛け」をどのようにデザインし学習に活かしていくかを考案することは、協働して学習を進める場である学校授業においてきわめて肝要なことであると言える。この論考は「究極的には分かりあうことができない他者」どうしのコミュニケーションに言及している点についても重要で、自らの思考を明快に他者に伝達することや、他者の意図をしつかりと受けとめ理解することの大切さについて共感することは言うまでもないことである。そして、文章に（決して顕在化しているとはかぎらない）内在する多くの要素をクリアにとらえ、「自分たち」のよりよいありようを考案していく主体的態度を育成することの大切さを論じた前者の論考に盛り込まれている内容も、国語という教科科目にかかわる者として念頭に置くべきものであると考

⑤ 岡田真範【コラム】視点 助川幸逸郎・幸坂健太郎編『文学授業のカンドコロ 迷える国語教師たちの物語』文学通信 二〇二二年七月七日

⑥ 中央教育審議会 平成二八年二月二日発表。ちなみにここでは、「現代の国語」については次のような方向性が提案されている。

実社会・実生活に生きて働く国語の能力を育成する科目

○実社会・実生活における言語による諸活動に必要な国語の能力の育成

○例えば

・ 目的に応じて多様な資料を収集・解釈し、根拠に基づいて論述する活動／・文学作品等を読んで、構成や展開、優れた表現などの効果について言葉の意味や働きに着目して批評する活動

・ 根拠を持って議論し互いの立場や意見を認めながら集団としての結論をまとめる活動 等の重視

これらがベースコンセプトとなり、現学習指導要領が策定されたわけであるが、このことについては、『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 国語編』に以下の内容が示されている。

第1章 総説 第1節 改訂の経緯及び基本方針

1 改訂の経緯

今の子供たちやこれから誕生する子供たちが、成人して社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予測が困難な時代となっている。また、急激な少子高齢化が進む中で成

えている。自らが置かれる環境や立ち位置に基づいた思考や行動指針について、往々にして無意識のもとで構築されている場合がある。くわえて、その無意識ゆえ、自らの思考を前提化・正当化してしまっていることがあるかもしれない。このような陥穽に陥ることなく、独りよがりな思考がもたらすさまざまな悪影響にとらわれることなく、他者と良好な関係性のもと多くの物事をこなしていくことがますます求められるこれからの時代において、他者とのコミュニケーションのありようや自分自身の内実の検証・深化をも内容として扱う国語という教科科目に課せられた責務は大きい。前者の論考は、この点にあらためて意識を喚起してくれるものとなっているのである。

このように、先ほど紹介をした二つの論考に共感をおぼえながら、『現代の国語』の所収の複数のコンテンツを組成して用いつつ、「多様な文章等を多角的・多面的に理解し、創造的に思考して自分の考えを形成することができるようになる。」という大きな目標を設定した。この独自の目標設定については、文部科学省発行『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）別添資料』⑥内の、「高等

学校国語科の改訂の方向性」として示された「【論理国語】」部に関する内容を援用している。『現代の国語』の学習材を用いて『論理国語』に関する目標を立案するのはいささか奇異に感じられるところもあるかもしれないが、高等学校学習指導要領「現代の国語」の目標（２）には「論理的に考える力や深く共感したり想像したりする力を伸ばし、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、

熟社会を迎えた我が国にあつては、一人一人が持続可能な社会の担い手として、その多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待される。

（中略）

このような時代にあつて、学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め、知識の概念的な理解を実現し、情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようになることが求められている。（後略）

第3節 国語科の目標

21世紀は知識基盤社会の時代であり、新しい知識、情報、技術が、社会のあらゆる領域での活動の基盤として重要性を増している。一方、そうした知識、情報、技術をめぐる変化の早さは加速度的となり、情報化や国際化といった社会的変化が、ますます複雑で予測困難なものとなつてきている。その中であつて、国語で理解し表現する資質・能力は、人々の知的活動や創造力が最大の資源である我が国において、社会の変化に主体的に対応できる力を支える基礎的・基本的な資質・能力として、今後一層必要性を増していくと考えられる。また、そのような国語の資質・能力を総合的に身に付けていくことは、人間形成の上でも必要不可欠なことである。高等学校国語科は、従前、社会人として必要とされる国語の資質・能力の基礎を確実に育成することを重視しており、今回の改訂でもそれに変わりはない。これを充実させるためには、生徒の生涯にわたる社会生活全般を視野に入れた指導が欠かせないが、とりわけ、学校生活にあつては、その生活全体の中で国語に対する関心や理解を深め、国語に関する資質・能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、生徒の言語活動を充実することが大切であり、それには学校全体の共通理解が必要である。

③ 「現代の国語」ならびに「論理国語」それぞれの科目における「目標」について、参考までに以下に引用しておく。

・「現代の国語」

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語的的確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを旨とする。

（１）実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする。

（２）論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。

（３）言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わりようとする態度を養う。

・「論理国語」

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語的的確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを旨とする。

（１）実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする。

（２）論理的、批判的に考える力を伸ばすとともに、創造的に考える力を養い、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。

自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。」というものがあり、ここに、『論理国語』にうたわれている批評的な観点も含めての「多角的・多面的」という要素を入れ込みながら読解スキルを養成することが、多様化し解がひとつではない社会を生き抜いていくためのひとつの有効な素地となるのではないかという思いから設定したものである。

このようなコンセプトを意識しつつ、次章では複数学習材を組成した授業展開の試みを紹介していくこととしたい。

二 授業実践の具体

前述のとおり、本校で採択している筑摩書房版『現代の国語』に所収されているもののなかで、昨年度一年次の授業でとりあつたものは以下の文章群であった。①～⑤の順序性でもって読み進める実践とした。カッコ内は、教科書における単元（章立て）のタイトルを示し、「Ⅱ」の先はいわゆる「主題」として各文章が論ずる内容を簡潔に記したものである。そののちの「◎」「部」（太字）については、授業者が学生へ意識してほしいという意図を示し、随所でこの意図について触れながら授業を進めることとした。

① 齋藤重矢「サイエンスの視点、アートの視点」

（第1章 問うこと、語ること）

Ⅱ 自らの中から、素直に興味関心を引き出していくことの大切さ。

◎ **サイエンスとアートは別分野ではあるが、根源はどちらも「感動・気づき」であり、それを隠せずアウトプットすることが肝要。「サイエンス」分野に足を踏み出す際のマインドとして意識してほしい。**

② 苦野一徳「一般化のワナ」（第1章 問うこと、語ること）

Ⅱ 自らの意見の「絶対化」という陥穽に留意すべき。

◎ **自らの持つ考えが、他者と比してどのような意味合いを持つのかを客観視できるようにしてほしい。**

③ 長田弘「会話と対話」（第7章 伝えること、受け止めること）

Ⅱ 「対話」という方法を用いた生産的・建設的共通理解構築の重要性。対比軸として「会話」を活用。

◎ **他者と関わる際の姿勢を再考し、真摯な態度で他者と関わる肝要さを再**

（3）言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。

確認してほしい。

④ 内田樹「ことばとは何か」（第2章 評論文への招待）

Ⅱ 「対話」をかなえていく際に用いる「ことば」についての蓋然的な説明と理解を促す。

◎ **「ことば」を体得することが自らの世界観を広げていくためには必要不可欠であることを知り、積極的にその習得や運用に努めてほしい。**

⑤ 西谷修「名づけと所有」（第10章 複眼的な視点）

Ⅱ 「ことば」による名づけのメカニズムとその危険性。

◎ **良くも悪くも「ことば」が物事や世界観を規定することに思い至り、積極的に用いいつも慎重さや配慮の大切さを再確認してほしい。**

自分自身に内在する思考やその立ち位置を把握することからはじめ、それをアウトプットするために必要不可欠な「ことば」の問題系に話を発展させることを大きな流れとして規定し、一年次の授業をスタートさせた。

コロナウィルス感染症による緊急休講や、その間のオンラインでの授業展開期間もあつたため、対面にて学習を進めることが十分にはできなかったことが悔やまれる。現二年生は、中学一年次年度末に休講措置が取られ、学校の中心として活躍の場があつたであろうその中学校時代を思うように過ごすことができなかった学年である。今年度になり規制が緩和され、ようやく多くの活動が可能になってきたとは言うものの、コロナ以前におこなってきた本格的な協働活動をほぼ経験することなくここまで来ていることの影響は計り知れない。今後も学習活動を進めながら、他者とかかわること、そしてかかわる自分自身の把握（のしがたさ）などについて、粘り強くコーチングを続けていきたいと思う。

さて、これらを取り扱うにあたり、学生たちの便をはかるという目的を鑑み、「授業デザインのロードマップ」を提案し、各文章読解ともそれにしたがつた授業展開とした。具体的手順は、(一)「漢字・語句のリサーチ&マスター」、(二)「内容の概観」、(三)「コア脚問の攻略」、(四)「発展的内容の考察」の四つである。学習する文章が新規のものとなったとしても、この工程を押さえながらアプローチをかけていくことによつて、文章内容の攻略と理解の道筋を与えるモデルケースとしてほしいという思いからである。のちにも触れることとしたが、この授業デザインについての改善意見は見られず、必ずしも国語に好感を持っているとは限らないであろう工学系志望の学生たちに、ある程度の親和性を持つて受け入れられたようである。また、(二)「内容の概観」をおこなつていく際には、多くの成果を出している「シンキングツール」を援用しながらのものとした。イラスト部にどのような内容を入れ込んでいければ完成に至るのかを文章のなかから探索しながら読みを深めていく活動は、結果として意欲を保つて学習することに直結するものであった。今後も文章にあわせて多種多様なものを援用しながら授業展開に期したいと思う。また、(三)「コア脚問の攻略」については、それぞれの文章で骨子となる表現を選択し、その内容深化を期して記述式解答を作成することによつてなしとげることが企図したものである^⑧。まずは個人で解答の考察をし、他者と答案をめぐつての意見交換をしたのち、授業者からレクチャーされる答案作成に関するフォーカスポイントの解説を受けつつ自己答案のブラッシュアップ、最後に授業者の解答例と比較して完成、という流れを構築した。最後におこなう(四)「発展的内容の考察」については、文章内容をふまえた「ふりかえりワークシート」を都度作成し記載をさせた。ただただインプットのみではなく、文章内容をどのように応用しアウトプットができるかを網羅した活動も一連に盛り込むからこそ、その内容を自らの血肉として内在化できる大きな可能性を担保することにつながると考えたからである。ここでも協働活動を取り入れ、学生たちは周囲との意見交換を繰り返しながら意欲を保つて授業に臨むことができていた。

⑧ ちなみに、高専における学力選抜時の国語における入学試験問題の解答形式は客観式（選択肢）のものであるし、推薦選抜試験においては作文科目は実施されるものの、読解内容を記述式で問うような問題は出題されないの、学生たちには記述問題の訓練としてあえてこの形式にて経験値を蓄積させるようにしている。

「サイエンスの視点、アート」ふりかえりワークシート

組 番 氏名

●ルーブリック自己評価（それぞれの項目に「○」を付けよう）

	S (把握)	A (ほぼ把握)	B (まあ把握)	C (いまいち)
読み書き不安な漢字の抽出 語句の辞書的意味の習得				
文章「内容」の把握				
記述問題への対応方法 （「着眼点や突破口」の発掘） 自らにも活かせる行動指針 （ためになった・参考になった点）				

●文章の内容にしたがい、自分なりに以下の設問に答えていこう。

【必須解答】「これまでに経験した、自分のプチ感動」の内容

【どちらか選択 or どちらもできる人はどうぞ】「？」や「アート」に変換

「？」

「アート」

●この文章に関わる感想（「読前→初読→授業をとおした読後」を中心に記載）

●授業デザインについての提案など

お疲れさまでした！次は「現代の国語」「一般化の7+」を読解していきます！

「会話と対話」ふいかえいワークシート

組 番 氏名

●ループブック自己評価（それぞれの項目に「○」を付けよう）

	S (把握)	A (おぼ把握)	B (まあ把握)	C (いまいち)
読み書き不安な漢字の抽出 語句の辞書的意味の習得				
文章「内容」の把握				
記述問題への対応方法 （「着眼点や突破口」の発掘）				
自らにも活かせる行動指針 （ためになった・参考になった点）				

●「会話」の概念をふまえ、それに一番便利だと考えるツールは？

●次のテーマにて、「対話」の概念をふまえたディスカッションをしてみてください。

「♡きのこの山 vs ♡たけのこの里」

【自分の立場（きのこ or たけのこにしぼってみる）と、その理由】

【立場のちがう学生との「対話」で得られた意見 ×「会話」／×「喧嘩」】

【それをふまえて、このテーマについて結論づけてみて】

●この文章に関わる感想（「読前→初読→授業をとおした読後」を中心に記載）

●授業デザインについての提案など

お疲れさまでした！次は「現代の国語」「ことばとは何か」を読解していきます！

「一般化のワナ」ふいかえいワークシート

組 番 氏名

●ループブック自己評価（それぞれの項目に「○」を付けよう）

	S (把握)	A (おぼ把握)	B (まあ把握)	C (いまいち)
読み書き不安な漢字の抽出 語句の辞書的意味の習得				
文章「内容」の把握				
記述問題への対応方法 （「着眼点や突破口」の発掘）				
自らにも活かせる行動指針 （ためになった・参考になった点）				

●「一般化のワナ」にハマってしまっていたエピソード

●次のテーマにて、クラスメイトと本質（このことの本質が何か）観取をしてみよう。（Youtube 視聴内容を参考に）

「懐かしさ」

【自分の信念】

【他学生の考え】

【それをふまえて、本質観取】

●この文章に関わる感想（「読前→初読→授業をとおした読後」を中心に記載）

●授業デザインについての提案など

お疲れさまでした！次は「現代の国語」「会話と対話」を読解していきます！

「名づけと所有」ふいかえいワークシート

組 番 氏名

●ループブック自己評価（それぞれの項目に「○」を付けよう）

	S (把握)	A (おぼ把握)	B (まあ把握)	C (いまいち)
読み書き不安な漢字の抽出 語句の辞書的意味の習得				
文章「内容」の把握				
記述問題への対応方法 （「着眼点や突破口」の発掘）				
自らにも活かせる行動指針 （ためになった・参考になった点）				

●「高専」ということばがけになうイメージと、生活してみても得られた実感について、自由に記載してみよう。（イメージ）

（実感）

●この文章に関わる感想（「読前→初読→授業をとおした読後」を中心に記載）

●『現代の国語』にて読解を進めてきた文章群をふりかえり、授業者がどのような意図をもってこれらの順序であつてきたか、自由に記述してみよう。

①「サイエンス」、②「一般化のワナ」、③「会話と対話」、④「ことばとは何か」、⑤「名づけと所有」

●授業デザインについての提案など

お疲れさまでした！次は「言語文化」「兎のぞら寝」を読解していきます！

「ことばとは何か」ふいかえいワークシート

組 番 氏名

●ループブック自己評価（それぞれの項目に「○」を付けよう）

	S (把握)	A (おぼ把握)	B (まあ把握)	C (いまいち)
読み書き不安な漢字の抽出 語句の辞書的意味の習得				
文章「内容」の把握				
記述問題への対応方法 （「着眼点や突破口」の発掘）				
自らにも活かせる行動指針 （ためになった・参考になった点）				

●ノート記載「クラゲチャート」における、「自分で！」で考案した内容（いくつでも）

●この文章に関わる感想（「読前→初読→授業をとおした読後」を中心に記載）

●授業デザインについての提案など

お疲れさまでした！次は「現代の国語」「名づけと所有」を読解していきます！

が…、以下についても記載をし、内容の予習をしてみよう。

●教科書 P228-235 を読み、「ことばとは何か」と共通する内容をまとめてみて。

三 どのような力を養成できたか

このような授業展開の具体をとおり、前述「多様な文章等を多角的・多面的に理解し、創造的に思考して自分の考えを形成することができるようになる。」という目標をかなえるべく実践を試みた。この成果については明確に測定することが難しいものであるが、前述の「ふりかえりワークシート」の記載や定期試験での成績がその指標になるのではないかと考える。ちなみに、この実践における内容を範囲とした定期試験の扱いは二回に分けたものとし、それぞれの試験においての各クラスの平均点は、一〇〇点満点中八〇点前後であった。学生初見の文章も取り入れた出題としたなかでは、学生たちの健闘が見られた^⑥。シンキングツールによる内容整理についても板についてきたようで、国語の授業以外においても、たとえば工学系の専門科目におけるテキスト読解等の際にも援用している姿が次第に見られるようになってきた。

さて、今回紹介をした一連の授業を終えるタイミングにおいて、先に紹介をした「ふりかえりワークシート」において、『現代の国語』にて読解を進めてきた文章群をふりかえり、授業者がどのような意図をもってこれらの順序であつてきたか、自由に記述してみよう。」という項目を設け、自由に記述してもらったこととした。冗長になることを承知のうえ、紙幅の許すかぎりで学生たちのコメントを参照してみたい。なお、①～⑤の番号については、前述の学習材文章に付したものとなっている。

I 言葉や文章、会話などで、感性（感動とか「！」とか）言葉の意味→会話、対話の二つの使い分け→名前の存在→名づけによる影響。

どんどんとスケールが大きくなっている。

II ③→④→⑤では言葉の大切さを学んだような気がした。

⑥ 今回の『現代の国語』教科書を用いた実践のなかに、いわゆる「定番教材」「国民教材」は含めずに（また教科書自体にも所収がなかったこともあり）授業をおこなってきたが、定期試験においては、山崎正和「水の東西」をベースとした問題を出题し、二項対立概念その他の整理や読解スキルが体得できているかを問うた。試験後の学生たちへの聞き取りでは、この「水の東西」は全員が初見であったというが、問題の難易度の関係もあつてか、この文章にまつわる問題（問いを五つほど準備した）の正答率は約九〇パーセント以上に及んだ。

まず③で言葉のあり方、対話について学び、④・⑤で名づけることによつてどんなことがあるかについて学んだ。④→⑤と学ぶことで、名づけについてより深く学べるため、そのような順序にしたと感じた。

III 大まかなもの↓自分たちにも関係するもの↓それを深掘りしたものの順で一つずつ内容がかさなる部分があるので次のテーマに入りやすい。文章量が少しずつ多くなるから慣れていきやすい。

IV ①疑問や発見などから、②（哲学）本質を洞察していくようになり、そこから③論じ合う対話や限定的な場において通用する会話をすることになった。そして④対話や会話で発することばとは、名前がつくことで、ある観念は、私たちの思考の中に存在することになること、が分かり、⑤も同じように、名を与えられたことで、ものは形をもつて存在し始めることが分かる。

V ①で身のまわりの物事に目を向けること、②で物事の本質を見ること（↑対話や議論が大切）③で対話のあり方（↑言葉使う）、④で言葉の持つ力、⑤で④をさらに細かく、という意図かなと思いました。

VI ①・②では私たちが生活の中でおこりうる考え方・思想に関してのことが書かれていて、③に入るとその考えの中から私たちがつかう会話と対話の違いを文章として説明し、それを行うために使う「ことば」の意味について④で読み、⑤でさらに深く掘り下げていった。

矢印を用いつつ、文章間のそれぞれのつながりを意識しようとする記述が多くあつた。前述のとおり、同内容・同観点における文章を学年全体で取り扱い、

低学年次ということもありアプローチの手法も論者が提示しながら授業を展開してきたわけだが、各文章の連動性を考えさせるこの局面においては各学生の多様なコメントが見られ、苦しみながらも一連の授業内容を主体的にとらえることができていたようであった。

また、以下のようなコメントも見られた。

- VII ①や②を通して文章やものの見方を学び、③で会話と対話のそれぞれが持つ力を理解すること。そして会話や対話に含まれることばの力について④・⑤を通して理解するため。

- VIII ①⑤の文章は、一通りのつながりがあるように思えた。

①では、国語の文章読解の基礎となる「正解がない」や「気づき（？や！）などを意識させ、②では、文章を構成する際に陥りやすい「ワナ」や「本質観取」が文章の中心となっていた。③では、言葉の使い方、④では、言葉（名づけ）という概念や使う理由、⑤では、言葉（名づけ）の実例と影響のような、全体的に「国語らしさ」を意識させる構成だと感じた。

- IX ①で国語の文章の読み方（「！」を見つけて「？」にする）を知って、②で文章の中にかくれている注意点を知り、③で①・②で得た知識を使って会話と対話の違いを考え、④で会話（対話）をよりくわしく見た「ことば」にふれ、その発展として⑤の授業を行ったと思います！

- X ①で国語の授業の取り組み方を学んでもらう。これを活かし、②で自身の体験を過度に「一般化」していかないか振り返り、物事の本質に目を向けること。③で対話と会話のはたらき、対話のもつ力、④・⑤でことばや「名付け」をテーマにそれらがどれだけ大事な機能をするか、を知ってもらい今後の生活に応用していったほしいという意図があったんじゃないでしょうか…。

おおむねⅠ～Ⅵのコメントと趣旨は同じであるものの、「文章読解の基礎」

や「国語の文章の読み方」、「国語の授業の取り組み方」という記述もあるように、導入期間における授業者の指導方向性として、至極限定的（国語の授業においてのみ実用）にとらえられてしまったふしがあるかもしれない。授業者としてこの点を反省しつつ、より汎用性のあるスキル養成の一方策としての文章読解レッスンであることをより明確に学生たちに打ち出しながら、今後も授業をデザインしていこうと考える。

さて、授業者の願いや企図、すなわち、本論第二章太字部分の内容を超克するかたちで、今回の一連の授業活動をとらえることができていた学生たちもいた。次の引用はその一部である。

- XI ①は全く違うように見えて似ているものを比べて、どんなものにも共通するところがあるということ、②はイメージ（常識）の恐ろしさ、③は相手を思いやり、言葉を交わすことの大切さ、④は名付けの重要性、⑤は名付けの危険性。

①で文を読むだけでなく身近なものや事として見てみることで、②・③で決めつけないで相手と言葉を交わすこと、④・⑤でその中で使われる言葉の持つ力を学ぶ。

- XII これからの人生で、たくさんの物や人、出来事と出会う。そこで、自分を成長させるためにどのようにそれらを見て判断し、自分の考えを伝えるか。その上で、言葉のもつ意味や歴史などをしっかりと理解して伝えられるか、を、自分たちができるようにするため。

今般の一連の授業におけるもくろみとして、前述第一章でも論じたとおり「多様な文章等を多角的・多面的に理解し、創造的に思考して自分の考えを形成することができるようになる。」を設定し、語彙力や文章読解スキルの向上の養成をしつつ実践を重ねてきた。このことに肉薄する内容を記述してくれた学生が少なからずいたことは、一定の授業実践の成果とすることができるとも思えない。

おわりに

目まぐるしく変遷を続ける諸問題に取り巻かれた学習者の「読み」やことはの力を育むために、学習材をどのように活かすことができるか。高等学校新課程一年めの昨年度、『現代の国語』の教科書におさめられている学習材のとり扱う順序や内容を論者なりに創意工夫しながらの授業展開の一途を紹介した。前述のとおり、明確に、どの点において成果があつたかを測定することはきわめて難しい。高等学校では観点別評価もあらたに導入され、その把握に意を用いているものの、それが生徒の前途につながる指針の提示に十分機能しているのか、ただただ現場の先生方の負担感や疲弊につながっていないかどうかが今後問われることとなる。少なくとも高専における論者の今回の教育実践は、高等学校に導入されている評価をふまえ、それを数値化し把握するという観点については課題を残すものとなっているゆえ、今後の課題とし、ぜひともこの点からの何かしらの提案ができるよう今後も試行錯誤を重ねたいと思う。

また、論者は高専という場ならではの特質を活かし、二年間にわたり同教科書（二種類ではあるが）を取り扱うことができているわけだが、すべての高等学校が、というわけではないにせよ、多くは一年次に二種類の教科書を用いた、いとまの少ない授業展開になっているとお聞きすることが多い。じつくりと教科書所収のテキストを精読し、その表現の豊饒さや背景に隠された意図ならびに状況等へ目配りしながら内容を「味読」すること——「スクール」の語源となったと言われている「スコレー」「スコリア」——「余暇」という概念をあらためて思い起こすなかで、今後「味読」「精読」の要素をもふまえた授業デザインについて思考を深めていきたいとも願う。

⑥ このことについては、たとえば既刊の参考文献として『高校国語 新学習指導要領をふまえた授業づくり 評価編』（大滝一登編著 明治書院 令和四年六月一〇日）などがあり、示唆に富む。ちなみに論者が現二年次においての時点で取り扱った、『現代の国語』に所収されている文章は以下の二つである。

- ・ 身体、この遠きもの（第3章 ここでは伝える思いと考へ Ⅱ自らを構成する要素としての身体への再照射。
 - ・ 主体という物語（第9章 主張の論理的な伝え方 Ⅱ主体という概念のフィクション性
- いずれも学生自身にとって身近な存在である身体や自己について哲学的に思考し、そのありようを再考させる内容となっている。いわゆる観点別評価についても試みているので、別稿にて論じる機会を設けたい。

学習材がもたらしうる「論理的な思考力育成」の可能性と期待、あるいはその限界や問題点について、実践をふまえさらに深めていく試みをおして、学生・生徒たちのよりよい世界観の醸成に寄与する教育活動を提供していく所存である。